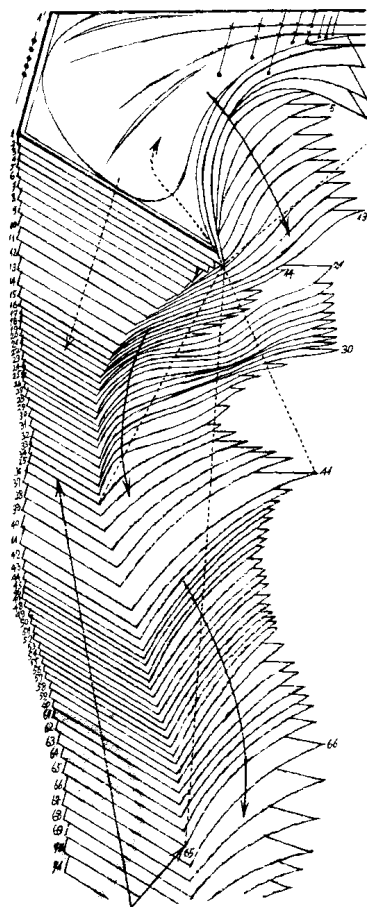


荒正人著作集

第一卷

第二の青春



正人著作集

第二の青春

荒正人著作集 第一巻

1983年12月15日 第1版第1刷発行

著 者 荒 正 人
© 荒 静枝 1983年

発 行 者 菊 地 喜 三 次

印 刷 所 株 式 会 社 厚 徳 社

製 本 所 東 京 美 術 紙 工

発行所 株 式 会 社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9

電 話 03 (291) 3 1 3 1 ~ 5 番

振 替 東 京 9 - 8 4 1 6 0 番

郵便番号 1 0 1

落丁・乱丁本はおとりかえいたします Printed in Japan

荒正人著作集 第一卷／第二の青春／目次

『文学時標』発刊のことば	5
--------------	---

I

第二の青春	10
民衆とはたれか	36
終末の日	68
民衆はどこにいる	103
三十代の眼	115
晴れた時間	125
白鳥的ペシミズム	143
ペチョーリン	163
なかの・しげはる論	181

後記	199
Ⅱ	
火	202
自分の蠟燭	219
負け犬（ア ندا ・ ド ッ グ）	232
Ⅲ	
戦後	274
批評の変貌	311
解説	323
本多秋五	

荒正人著作集

第一卷／第二の青春

本集に収録するに際して、各作品の漢字は新字体に改め（俗字・宛字は原文のまま）、仮名づかいは引用文以外、現代仮名づかいに統一し（送り仮名は原文のまま）、促音・拗音は小字で表記した。

『文学時標』発刊のことば

石もまた叫ばん！

いつ終るともなかった絶望の長夜にも、ついに光がさしてきた。惨苦と汚辱の反動十数年を耐えて、今日ここに自由の陽ざしに立つことを、生けるしるしあり、と心から悦ぶ。

おもえ！ われら青春の日に目撃した惨事の数々を……。日本ファシズムが文学に加えた蛮行と凌辱は、消えることのない癰痕と化し、いまなお疼きを覚えるのだ。

かれら文学の敵は、まず、プロレタリア文学運動を圧殺し、つぎにその血まみれの手を、同伴者作家、進歩的・自由主義的文学者のうえにと伸ばした。かれらは平和と人道を愛する作者たちからペンをもぎ取った。さらに、かれらは文学流派としてのリアリズムを抹殺した。生活派、現実派、そして『綴方教室』風の作文さえも、『犯罪』なりとして、文学を愛する数多くの人人を検挙したのであった。かれらの狂行は、実証主義、合理主義の否認を以て、ついにその絶頂に達した。宗教裁判の再現であった。文学は完全に息の根を絶ってしまった。

だが、かれらファシストたちと陰に陽に力をあわせた作家、評論家がいたことを忘れることはできない。その最大なるものは、『聖戦』文学の製造者とその支持者である。かれらは銀三十枚とキリス

トを換えたユダのごとく、卑小な野心、些かの生活の資をえんとして、文学の純潔を娼婦のように自らの手で泥土に委ねたのであった。言うなかれ！指導者にあやまられていたのだと。或は、官憲の圧迫のため舞文曲筆を敢えてしたのでと。あの呪縛にかけられたいけにえの特攻隊員すら、戦争の終りには、幾人ともなく脱走を企て、自らの運命をきりひらかんとしたではないか。『聖戦』文学の何万頁は、ルージュを以て、身を守らんとしたマニラの少女たちについて報じた、連合国軍司令部発表の数行におよばなかったのだ。ああ、文学の大空白時代よ！

『聖戦』文学者共はこのことを恥としないのか。かれらは、パンをもとめる読者に石をあたえたのだ。そして、『聖戦』が『醜戦』となった今日になっても、かれらには、己れの師を売ったことを後悔して、縊死せるユダの心情すら湧かないのだ。かれらは新しい自由の文学に便乗を試みんとあがいているのだ。

石もまた叫ぶ！

われらは、かれらを監視しよう。聖なる芸苑を彼等から守ろう。それはわれらにあたえられた文学的使命である。

『文学時標』は、純粹なる文学の名において、かれら厚顔無恥な、文学の冒瀆者たる戦争責任者を最後の一人にいたるまで、追求し、弾劾し、読者とともにその文学上の生命を葬らんとするものである。このことは、文学領域において民主主義を確立するための第一歩である。これなくして、一切の文学再建は砂上の楼閣であろう。

われらは一切の政治上のイズム、文学上の流派から解き放たれて、大胆率直に芸術のための芸術を

信じ、文学の高貴性を信じ、今後の活動を行わんとするものである。文学はこの道によってのみ正しい政治につながるのだ。

いま、われらは文字通り、数本の甘藷か一冊の書籍か、といった窮迫状態にまで追いやられんとしている。われらは飢餓に脅かされつつも、一冊の文学書に愛着を禁じえない精神を良しとする。これはいままで文学的貴族主義として誤解されてきたが、元来このような精神こそ、ひろくふかく人民のなかに養わるべきものではないのか。一部少数者の手より文学を奪い返し、これを人民の手に解放すること——これこそ、文学領域における民主主義革命の最終の目標である。

『文学時標』はこれをめざして、力を尽してたたかうであろう。

石もまた叫べ！

第二の青春

ドストイェフスキイのあの稀有の体験、すなわち、ペトラシエフスキイ事件の累連者として、一旦は死刑の宣告をうけ、執行直前に、あらかじめの筋書にもとづく特赦が降り、死一等を減ぜられて、シベリヤへの流刑になるという挿話をしり、ほとんど絶望にも似た羨望の念をおぼえたことがあった。——文学書をよみはじめたころのことである。かれの天才よりも、その千万人にひとりもめぐりあうことのない異常な人生経験にたいするうらやましさであった。それは、人生の深淵へのむしろロマンティックなあこがれから発したものであったのかもしれない。……

しかし、わたくしたちがこんどの敗戦で知ったところのものは、かの偉大な十九世紀ロシア作家のそれに比して、いささかたりとも劣るものではなかった。本土決戦、一億玉碎という自暴自棄の作戦（！）にかりたてられてきた善男善女は、無条件降伏の詔勅が発せられる直前まで、集団自殺を覚悟していた。空襲に際しては、あのごみ棄て穴にもおとる防空壕の片隅にかけがえのないいのちを託してきたのだ。そしてまた、一片の赤い紙に恩愛の絆をことごとく絶つことを無上の光栄として強要されてきたのであった。

中国本土への侵略戦争が火蓋をきったのは、わたくしが最後の学校教育を了える年の真夏のことだ

あつたが、そのとき以来十年にちかい歳月を一日たりとも、死への招待状にたいする恐怖なしには、夕刻、家の敷居をまたぐことができなかった。——ああ、今日もこなかった。が、あすは、一月あとは、一年さきには……。いつか、あのペスト菌のように忌わしい紙切れが、自分を無意味な殺戮へ、「赤き死の笑ひ」のなかにひきずりこんでゆくであろう。天皇陛下万歳！ と、奴隷のことばをさけて生をおえることのできないものにとつて、過去数千日の戦争又戦争の期間が、生きながらの地獄であつた、と述懐しても、それはなんの誇張でもない。そのころわたくしが、電車や汽車で一切軍服と席を隣りあわせることが生理的にできなかったと告白しても、それがたんなる強迫観念の仕業のみではないと信じてもらえるであろう。やはり、そのころのこと、わたくしは汽車の旅先で、ひとりの学生が女文字の手紙を抜いているのを盗見したが、そこには——もとせのいのちねがはじいつのかみたてとゆかんきみとちぎりで、としたためられていた。その恋人同志にたいする哀憐の情は畢竟おのれをいとおしむ心にほかならなかつた。

ところで、ドストイェフスキイが死神と膝つきあわせたのは、つぎの数分間のことであつた。——一八四八年十二月二十二日、セミヨーノフスキイ広場で、思いもかけず死刑の判決文がよみあげられ、同囚のものが柱に三人づつ縛りあげられ、万事が終焉をつげようとしたその瞬間に、突如として執行中止の鐘が鳴りひびくまでのことであつた。永劫の淵のうえに吊りさげられたのは一瞬時であつた。けれども、わたくしたちが冷たい死の壁を見凝めてきたのは文字通り十年の歳月であつた！ 手帳を繰ってみよう。日附はないが、八・一五にちかいころであることは間違いない。

「……『伸子』の冒頭、そして『風と共に去りぬ』の結語——ぼくはふとそのことを考へてゐた。そ

れはあまりにも現実からはなれた、遠い遥かなおもひであり、空想とよんでもなほそらぞらしい感じのするものであつたけれど……。

だが、もはや洋菓子の味覚を忘れてしまつたやうに、この空想はぼくにとつてそれほど魅力あるものではなくなつてゐた。

一世紀ののち、一人の歴史家が現はれて、もしこのやうな現代の絶望についてかたりうるとしたら、ぼくはそのひとのヒューマニティにみちた想像力にさぎよく帽を脱ぐであらう。」

この断想のすぐつぎの頁には、マルスの唄声のきえた日の喜悅の情について、現実の地上樂園について、しるされているのだ。八・一五の数日まゝに降伏の早耳的ニュースを聞いたわたくしは、その翌日買出袋を背負い利根川の一分流に沿つた道をひとりで歩きつつ、ある憤激をこめた奇怪な哄笑を虚空にむかつて二、三度繰り返したものであつた。そして、始めあるものは終りあり、奢れる者久しからず……と、口ずさんでいた。

いまかえりみて、すぐる半歳はうたがいもなく異常の年であつた。アヌス・ミラビリス地獄を見、天国を知り、最後の審判を見聞し、神神の顛落を目撃し、天地創造を実見したのであつた。ドストイェフスキ以上に稀有な、ほとんど信じうべからざる体験をかさねてきた。

フラス・ノルマス正常の年ならば、「第二の青春」などとは、狂者のことばであり、第二の初恋というにひとしく本来矛盾した修辭であり、もともとありえないことなのである。しかも、わたくしたち、限定すれば、昭和初年の左翼運動時代に青春を迎え、つづいて「黒い行列」を先導とする反動の時代をくぐり、こんにち三十代といわれているインテリゲンチヤが、きのうきょうを息づいている雰囲気は、壮年や中年

のそれではなく、まさに在りし日のものである。もちろん、初恋に喪った純潔がふたたび還らぬように、この青春もそっくりそのままのういういしい感覚をもって蘇ってくることはないけれども――。

その微妙なる差は、こんにちほんとうの青春のなかにあるわかいひとたちの生の感覚に対照すればわかるであろうか。たとえば、おそらくまだ十六、七の一少年と思われる或る中学生は、「……今まで頭から悪い者と教へ込まれてゐた共產黨員は、主義のためには投獄されて悲惨な目に遭ひながら飽くまで主義を捨てませんでした。その主義の可否はさておきあらゆる迫害にも屈しなかつた固い信念と節度には、率直に深い敬服の念を禁じ得ません。」ということばを一新聞に投書している。教育勅語と軍事教練とアルバイト・ディーンストのなから、なおかつこのような素朴、純粹、大胆な感受力をはぐくみえたことをたかく評価し、わけしりのおとなが、そんなこどもじみた、浅薄なことをといて、侮りすごすならば、むしろそれをこそ輕蔑するであろう。にもかかわらず、その少年自身の純な心は、すでに青春の日の感覚をとおく忘却の淵になげすてきたものにとつては、希つても二度と戻らぬものである。世路艱難のなかに瓦礫と化してきたわたくしたち三十代にとつて、このような健康な感覚は、たとえば、ギリシャの彫像のように、もはや肉体のなかにまで這入ってくることはないであろう。

それはそれとして、またべつのひとときが存することも否定できない。すぐる十月十日（四五年）の午後、わたくしは冷雨に頬をうたれながら、自由戦士の出獄を歓迎する会場にいそいでいた。この日はおそらく、日本歴史のうえに一エポックを劃するものとして、ながく記憶されるであろうが、その会場をうずめつくした群集と弁士の怒号叫喚のどよめきは、第三者には空疎抽象的な絶叫の羅列と

も、ヒステリックな憤懣の爆発とも、あるいは、政策をしらぬ不手際な会のもち方とも評されるし、たしかにその一面をもつてはいた。けれども、円形劇場でキリスト教徒を獅子に噛み殺さして快哉をさげんだ狂帝ネロと、本質的にはなんの異なるところのなかったわが天皇制の一端を知っているものにとつては、「牢獄に繋がること十有八年、独房に起居すること六千余日、闘い闘いて生き抜き、遂に志を曲げず、再び天日を仰ぐに至れる」と、河上肇が頌歌をよせたあの戦士たちをまのあたりにもては、思わず目頭が熱くなり、声にまででたのであった。かたわらの四十過ぎのおだやかそうな男も眼の縁にきらりひかるものがあつたし、べつの側の朝鮮人もしきりに叩頭をしていた。会のあと、デモをおえて、省線電車のなかで、見ず知らずの交通労働者ふうの五十ちかい男二人と、握手をし将来をちかつたのであった。時あつて、一瞬閃光のように蘇ってきて、心をゆすぶる、無垢の感覚の存すること、これまたひとつの消されない事実でもある。

冷静なるわれに立ち返れば、その日のつどいで袖ふれあつた数人の男たちも、じつは焼跡にならんでいる闇屋となんら変ることのない愚劣な存在であると断じてみたい気持ちにもなる。もはや昔日のごとく現代の聖なる英雄としての革命的・戦闘的労働者なるものの存在を無条件には信じることができないのだ。——これもひとつの心理的事実である。

ゴリキイは『不用人の一生』のなかで、主人公イヴセイに托して自分の体験をかたっている——イヴセイは、幼年の日火事にあつた。そのとき、日頃いがみあい、あらそっていた近所合壁のひとびとはじつにうつくしく協力しあつたが、しかもその翌日からは、ふたたび以前のように喧嘩争論をくりかえすのであつた。イヴセイはこのことを解きたい事実として追憶している。ゴリキイははた